

Leuven, 1971, pp. 540-545 に収録されている。

John Marenbon :

The Philosophy of PETER ABELARD.

Cambridge University Press, 1997, pp. xx + 373.

永 嶋 哲 也

本書で主題として扱われているアベラール（ラテン名 Petrus Abaelardus; 1079-1142）は、12世紀を代表する哲学者であり、今まで彼の研究が決して疎かにされていたわけではないはずであるが、彼の全体像、彼の哲学の全体像について何か一般に認められている共通理解があるようにはまだ思われない。それは、今までの諸研究が失敗に終わってきたからでは決してなく、むしろその原因は、一つにはアベラール自身がその全体像を描きあげるのに難しい複雑な人物だからであろうし、また一つには彼の生きた12世紀の西欧がまたその時代に対する幅広い知識を必要とするような複雑な時代だからであろう。しかしそういう難しい作業だといえるアベラール哲学全体の描像に関して、著者マレンボンに現在、最も相応しい研究者の一人だと言えるのではなかろうか。——著者には本書に先立って、1: *From the Circle of Alcuin to the School of Auxerre* (CUP 1981), 2: *Later Medieval Philosophy (1150-1350) An Introduction* (Routledge & Kegan Paul, 1987), 3: *Early Medieval Philosophy (480-1150) An Introduction* (Routledge 1988) などの著作があるが（なお、2と3に関しては、加藤雅人氏による邦訳、4:『後期中世の哲学』（勁草書房、1989）と中村治氏による邦訳、5:『初期中世の哲学』（勁草書房、1992）も出ており、また1, 3, 5は本誌において金井多津子氏により書評がなされている）、本書は、中世初期を専門とする著者が、通時的な中世哲学史の研究書をまとめた後に、中世初期の一人の巨人に取り組んだものだと言えるだろうからである。

本書は3部構成になっており、第1部で年代特定の問題や修道生活を含めて、アベラールの人生と業績について述べられ、第2部で彼の存在論、認識論、意味論という広い意味での論理的業績が論じられ、そして第3部で神学的文脈を含めた意味での倫

理理論が分析されている。

各部での議論を簡単に見て行こう。まず第1部の1章においては、彼の人生が、故郷のバレから、パリ、エロイズとのスキャンダルを経て、パラクレトゥス、サン・ジルダ、再びパリ、そしてクリュニーでの最期と、時間軸に即して述べられる。2章においては、「アベラールの著作の多くは彼の教師としての活動に密接に結び付いている」(p. 36) ので、論理的著作が成立時期順に取り上げられ、それらと関連付けて教師としての若いアベラールが描かれる。しかし結論として著者は、アベラールが若い頃取り組んだ論理学は後進の論理学者たちに追い越されてしまったと言う。彼の晩年こそ最も生産的で、彼の著作も独創性のある力強いものとなる、そのとき彼の関心はもっぱら神学へと向けられていたのだ、と著者はいい、3章へと論を進める。3章においては、神学的著作が、彼の修道生活と対応させられながら論じられ、また彼に関するその他の著述、つまりペトルス・ウェネラピリスがアベラールの晩年をエロイズに報告する書簡や、アベラールの書いた韻文についても論じられる。また第1部の補遺として、エロイズとの書簡の真偽問題も検討されており、著者は、書簡の真作性を疑う議論を説得力の欠けるものだと結論している。

次に第2部においては彼の論理学的分野での学説が検討されていくが、しかし彼の論理学書註解の発展や個々の議論の文脈が理解される必要のあるものだと認めつつも、むしろここでの意図は、より広がりを持つ哲学的問題へと彼が導かれていったそもそもの出発点を同定することにある。第4章において、『カテゴリー論』『イサゴゲー』に見られる存在論が素描され、註解書を著述するという思索の形でもって彼がアリストテレス、ポリフェリウス、ポエティウスから何を学んだか述べられる。著者が言うには、アベラールの存在論の根底にある原理は3点に集約される、つまり唯名論(個的でないものは存在しない)、強い自然主義(世界は自然種のメンバーで構成されており、任意の個の実体がどの種に属するかを我々は難無く知り得る)、そして個物の個々別々性(個物はそもそも個々別々であり、個体化の原理は問われ得ない)であり、これら三原理とそれら相互の関係が5章において語られる。ここで言われるように、存在するものはすべて個的なものだとアベラールは考えていたのであれば、言語において中心的な位置を占めるのが普遍であるので、この現実と言語との断絶こそが彼にとって普遍問題の核心となる。それゆえ7章での知覚・知識論を経て、8章で普遍について論じられるに先立って、6章ではもう一つの現実=言語間の断絶として、

付帯的性質を語る言語が論じられる。

そして第3部においては彼の倫理的・神学的分野での学説が検討されていくが、その倫理学と神学との関係を著者は、アベラールにとって倫理学が神学的思索の副産物としてあるのではなく、むしろキリスト教教義への導き手なのだ、つまり最高善についての議論（神学）を内を含むものとして善についての議論（倫理学）を位置付ける。その上で著者は、アベラール倫理学を三のレベルに分けて、最も抽象的なレベルを9～10章で、もっとも個別的なレベルを14章で、その中間を11～13章で論じる。——神の三位格、父、子、聖霊を神の権能、叡智、善性として理解するアベラールの基本線に沿って、「神は実際の世界よりも多くの物事を、よりよい物事をなし得るか?」「神が全てを予め知っているならば、如何なる仕方でも人の意志は自由であり得るか?」という問題に対しては9章において、「善なる全能の神が支配するこの世界に、どうして悪が存在するのか?」という問題に対しては10章において、アベラールがどのように答えたかを取り上げ、それらの議論が人間的道德についての彼の思想に結び付いていることを示す。神学的著作において神学的議論の形で現れるこれらの倫理的問題を扱う9～10章に対して、続く11～13章は、「アベラールの倫理学」と言われる際に人が連想するであろういくつかの要点について論じられる。つまり、意志することと、その意志に同意すること、行為すること、それらと徳・悪徳、罪・功德との関係がまず11章において論じられる。そして悪についてアベラールが論じるときその紙面の大部分が悪徳よりも罪について割かれるのであるが、「罪とはそもそも神への侮りである」という彼自身の論点に立って、12章では、神への侮りと、自然法・啓示による法、そして良心の関係が論じられる。逆に13章では善について論じられ、その三つの相、徳と愛と功德が扱われる。ここで、より個別的問題、つまり社会的な実践的倫理を14章で論じる前に、著者は補遺として、アベラール倫理学・神学の中で重要な位置を占める無私の愛（*caritas*）について論じている。つまりアベラールは *Theologia Christiana* と『ロマ書註解』の間で愛についての理解を深めているのであり、それはまさしくエロイーズからの書簡による影響に他ならないと論じる。

以上のように概観してくれば明らかであろうが、著者が主張しているのは特に、アベラールの倫理理論の洗練性である。このことはまさに、著者マレンボンの基本的立場をそのまま表している。つまり、20世紀後半になって盛んになった A. ケニーヤ

N. クレッツマン等に代表される「分析学派」と呼ばれる立場に対して、著者はその成果を評価し問題意識などは継承しつつも、歴史研究も重視する立場に自らを位置付けている。これが著者の基本的立場であるが、アベラール研究にあっては、「分析学派」に分類されるであろうトゥイーデイル以降の論理学分野の研究を評価し継承しつつも、しかし著者が標榜するのはアベラール後期の著作群である倫理学分野の、しかも神学書も内に含まれるような意味での倫理学分野におけるアベラール再評価である。論理的に鋭利ではあっても体系的でなく、ごく限られたアリストテレス論理学に基づいていたためにすぐに時代遅れとなってしまったアベラール論理学に対して、むしろアベラールにおいて評価すべきは包括的で体系的な彼の倫理思想であるというのが著者の主張の要点である。

アベラール研究にあって、一次文献、二次文献とも多くの資料にもとづきつつも、新しいアベラール評価を打ち出した本書は、まず間違いなく、今後のアベラール研究の動向を方向付ける重要な一冊となるであろう。しかし同時に、さらなる検討を必要とする論点を多く含んでいるとも思われる。例えば、著者が議論の前提として持っているアベラール論理学の評価やアベラール存在論への理解などは、論点としてはさらなる批判検討が必要なのではないだろうか。とはいえそれは、本書の欠点となるような「問題」ではなく、むしろ評者には、著者から投げかけられたアベラール評価に関する問題提起なのではないかと思われる。

LECTURA ECKHARDI

Predigten Meister Eckharts von Fachgelehrten gelesen und gedeutet, Bd.I,
herausgegeben von GEORG STEER und LORIS STURLESE,
koordiniert von DAGMAR GOTTSCHALL,
Stuttgart/Berlin/Köln 1998. Verlag W. Kohlhammer, VIII, 336 S.

松 田 美 佳

本書は、エックハルトの全集版ドイツ語ラテン語著作の出版元であるコールハンマー社から出版されている。本書の編集者である Steer と Sturlese はそれぞれ、全集版ドイツ語著作、ラテン語著作の編集に携わっており、現在のエックハルト研究にお